ふるさと熊野

筆道資料の探訪

鎌倉・室町時代

能書家と製筆技術者（筆結）の関係は古来より密接な関係にありながらこの資料は乏しいようです。

その中でわが町熊野筆のふる里有馬郡誌に伝統として次のような記録があります。

此人形筆の濫觴は往古人皇三十五代舒明天皇の皇后宝皇女に御子ましまさざるを嘆かせ給ひ帝に従ひ有馬に行啓座ししかば程なく皇子御降誕在らせらる、因って御名を有馬皇子と命させ給ふ

（この時皇子誕生を祝って人形筆が作られた）

その後永禄二年（一五五九）当地川上と云ふ者の手伝人に伴助と云う者あり皇子御誕生に因みて人形筆を始めて製しければ有馬人形筆として四方に喧伝せらると

これは筆に細工をほどこしたものであり、実際の筆はそれ以前から有馬に製作されていたものと推測されます。

鎌倉時代になって、我国で初めて武家政治というものが出来て公家と対立しました。これが書に与える影響は大きく、一種の武家様というものが出来ました。即ち世尊寺流が次第に武士の武強主義と合わなくなり衰えていったのです。

末期に禅宗が日本に入り禅僧らが渡来するようになりました。

禅宗の気質は武士のそれとよく契合しその勢力は他の宗教をおさえて武士の間に根強く入って思想の上にも又書道の上にも大きな影響を与えました。

南北朝から室町時代にかけて禅宗の広がりと共に人々の間に宋・元の書風を学ぶものが出てきましたが、この書風は剛健質実で武家の公文書はすべてこのように書かれました。

これを禅宗様と称して日本的な書風である世尊寺流、青蓮院流と区別しました。

△日蓮宗開祖
日蓮上人筆蹟